

# R5(2023)年 共通テスト本試 『俊頼髓脳』 現代語訳

次の文章は源俊頼とじよらうが著した『俊頼髓脳とじよらうのろう』の一節で、殿上人たちが、皇后寛子のために、寛子の父・藤原頼通の邸内で船遊びをしようとするところから始まる。

みやづかき  
1 宮司ども集まりて、船をばいかがすべき、

もみぢ  
皇后に仕える役人達は集まって、  
船ふな(の裝飾)をどうするのがよいか(を相談して)、

紅葉を多くとりこやりて、船の屋形にして、船さし  
紅葉こうじ(の枝)をたくさん取りに行かせて、  
(それを)船の屋根に(裝飾)して、船を操作する人

は侍さむらいの<sup>a</sup>若からむをさしたりければ、俄こはかに

は侍は侍で 若いような人を 指名したところ、 急遽、(指名された者たちは)

狩袴かりばかま染めなどしてきらめきけり。その日になりて、  
狩袴かりばかま(を催しに相應しく)染めるなどして、華やかに飾り立てた。 その日になって、

人々、皆参り集まりぬ。「御船はまうけたりや」と  
人々は、 皆、参集した。  
「御船は準備したか」と

尋ねられければ、「皆まうけて侍り」と申して、  
お尋ねになったので、  
「準備万端に整っております」と申し上げて、

その期ごになりて、島いがくれより漕ぎ出でたるを見れ  
その(＝船遊びの)時間になって、 (池の)島陰から 漕ぎ出た船を 見る

ば、なにとなく、ひた照りなる船を二つ、装束まじぞき  
と、 一部ではなく全て、 ひたすら輝いている船を二艘(とも)、 飾り立てている

出でたるけしき、いとをかしかりけり。  
様子は、 非常に趣が深かった。

2 人々、皆乗り分かれて、管絃くわんげんの具ども、御前  
人々は、 皆(二艘に)分れて乗って、 管絃の楽器類を、 皇后寛子

より申し出だして、そのことする人々、前におき  
から お借りして、 そのこと(＝演奏)をする人々を、 前にいそせて、

て、<sup>ア</sup>ちやちやしまはす程に、南の普賢堂くわんげんに、  
徐々に(船を)漕ぎ回す(＝動かす)うちに、 南の普賢堂(の前)に来ると、そこに、

そうづ

みずほふ

宇治の僧正、僧都の君と申しける時、御修法してお

宇治の僧正（＝寛子の兄）が、「僧都の君」と（人々が）お呼び申し上げた頃、（皇后への）加持祈禱を

はしけるに、かかることありとて、もろもろの僧た

していらつしやったが、「このよつなごと」（＝船遊び）がある」といつことまで、多くの僧

ち、大人、若き、集まりて、庭にみなみたり。

たち、年配者も 若い者も 集まって、庭に並び座っている。

わらはべ とも しうくわ

童部、供法師にいたるまで、繡花装束きて、

稚児や お供の僧に至るまで、花模様の刺繡の装束を着て、

さし退きつつ群がれるたり。

繰り返し（近づいたり）離れ（たりして）、群がって座っている。

3 その中に、良暹といへる歌よみのありけるを、

その中に、良暹といつた

歌人がいたが、

殿上人、見知りてあれば、「良暹がさぶらふか」と

殿上人（たち）が、顔見知りであったので、「良暹が（そこに）控えておるか」と

問ひければ、良暹、目もなく笑みて、平がりて

質問したところ、良暹は、目を細めて笑って、（畏まって）（返事として）平伏し

さぶらひければ、かたはらに若き僧の侍りけるが

ましたので、若い僧で側にお控えていた僧が（状況を）

知り、「よれに侍り」と申しければ、「あれ、船に

理解して、（良暹の代わりに）「そうぞういいます」と申し上げたところ、（殿上人たちは）「彼を、船に

召し乗せて連歌などせさせむは、いかがあるべき

呼んで乗せて、連歌などをせむとしたり、ぞうだろつか

と、いま一つの船の人々に申しあはせければ、

と、もう一つの船の人々に 相談申し上げたところ、

「いかが。あるべからず。後の人や、さらでもあり

「ぞうだろつか。（そんな行為は）あつてはならない。後世の人々が『そう』（＝良暹を乗せる）でなくても

ぬべかりけることかなとや申さむ」などありけれ

十分だったのになあ』と申し上げるだろつか」など（の意見が）あつたので、

ば、さもあることとて、乗せずして、たださながら  
「それ（＝後世に批判を受けること）も（きこ）あること」と思って、乗せないで、単にそのま

連歌などはせさせてむなど定めて、近う漕ぎよせ  
（＝地上にいなせるままで）連歌などをなせてしまおうなどと決めて、（良運の）近くに漕ぎ寄せて、

て、「良運、さりぬべからむ連歌などして参らせ  
「良運、（この催しに）相応しいような連歌（の発句）などを詠んで献上しなさい」

よ」と、人々申されければ、さる者にて、  
と、（船上の）人々が申し上げたところ、（良運は歌人として知られるに）相応しい者

もしさやうのこともやあるとて。まうけたりけるに  
で、「もしかすると、そのような（＝発句を求められる）こともあるか」と思って準備していたのだろう

や、聞きけるままに程もなくかたはらの僧にもものを  
か、（依頼を）聞いたやいなや、すべて 側の僧に何か

言ひければ、その僧、いづとしく歩みよりて、  
言ったところ、その僧は、仰々しく、非もつたいぶつて（船の方に）歩み寄つて（非近づいていって）、

「もみぢ葉のこがれて見ゆる 御船かな  
みふね  
「もみぢ葉が焦がれて（非色づいて）いるように見える、漕がれる御船だなあ

と申し侍るなり」と申しかけて帰りぬ。  
と申し上げますということです」と言葉をかけ申し上げて帰った。

4 人々、これを聞きて、船々に聞かせて、付けむ  
人々は、これを聞いて、二艘の船（の人たち）に（発句を）聞かせて、「続きを詠もう」

としけるが遅かりければ、船を漕ぐともなくて、  
としたが、（続きを思いつくのが）遅かったので、船を（しっかりと）漕ぐのでもなく、

やうやう築島をめぐりて、一めぐりの程に、付けて  
徐々に 築島を廻って、一周する間に、 続きを

言はむとしけるに、え付けざりければ、むなしく  
詠もう」としたけれども、 続きを詠むことができなかったので、 無駄に

過ぎにけり。「いかに」「遅し」と、たがひに船々  
過ぎてしまった。「どうだ（できたか?）」（そっちも）遅い」と、互いに二艘の船（の人たち）が

あらそひて、ふた二めぐりになりけり。なほ、え付け  
言い争ひて、(既に)一周になつてしまつた。それでもやはり、続きを詠む

ざりければ、船を漕がで、島のかくれにて、  
ことができなかったので、船を漕がないで、島の陰で、

「ウかへすがへすもわるきことなり、これを。今まで  
「しんじく」(非)で考えても 悪い事態である。 これ(=続き)を今まで

付けぬは。日はみな暮れぬ。いかがせむずる」と、  
詠まないのは。 日はすっかり暮れてしまつた。 どうするのがよいだろう」と、

今は、付けむの心はなくて、付けでやみなむことを  
今(となつて)は、詠もうという気持ちは無くて、 続きを詠まない終わってしまうようなことを

嘆く程に、何事も。覚えずなりぬ。  
嘆くうち、 (茫然として) 何も考えられなくなつてしまつた。

5 ごとごとしく管絃の物の具申しおろして船に  
仰々しく 管絃の楽器を(お願い)申し上げて、貸していただき 船に

乗せたりけるも、いささか、かきならす人もなくて  
乗せられども、 少しも、 かき鳴らす人もいなくて、 (船遊びは)

やみにけり。かく言ひ沙汰する程に、普賢堂の前に  
終わつてしまつた。(船上の殿上人たちが)このように言い争ううちに、 普賢堂の前に

そこばく多かりつる人、皆立ちにけり。人々、  
とても多くいた人々は、 みんな立ち去つてしまつた。 人々は、

船よりおりて、御前にて遊ばむなど思ひけれど、  
「船から降りたら、 皇后の御前で管絃の宴をしよう」などと思つ(てい)たけれども、

このことにたがひて、皆逃げておのおの  
この予定とは違つて、 みんな逃げてそれぞれ

失せにけり。宮司、まうけしたりけれど、いたづら  
姿を消してしまつた。皇后に仕える役人は、(室内での宴の)準備をしていたけれども、無駄に

にてやみにけり。  
終わつてしまつた。